平成20年度新潟大学人文社会・教育科学系プロジェクト経費（学系基幹研究）報告書

プロジェクト代表：鈴木　佳秀

プロジェクト名称：「19世紀の可能性　－ヨーロッパ19世紀学知における「多様性」と「学際性」の再検討－ 」

19世紀学学会・19世紀学研究所は2006年11月・2007年2月の創立以来、戦争の時代とも言える20世紀を根本的に反省するために19世紀ヨーロッパに成立した諸学問の再検討に着手した。すなわち19世紀学研究である。本年度は「活動報告」にも明らかなように、テーマを19世紀学とは何か、19世紀の再評価に絞り、5回のシンポジウム（「19世紀学とは何か－19世紀学研究の可能性」、「いまさら、ヨーロッパ－ARS（技術、芸術、学問）のあり方を問い直す」、国際シンポジウム「19世紀の再評価－19世紀の可能性」、「鈴木佳秀教授退官記念特別シンポジウム」、「19世紀の再検討－身体論、思想史、比較文化論の立場から－」）、4回の講演会（松本彰氏による講演「19世紀学とは何か：19世紀ドイツにおける市民社会・教養・学問」、Dr. Th. シュヴァルツ氏による特別講演“Hybridity: A Critical Conceptual History”、鈴木佳秀19世紀学研究所所長による講演「ヴェーバーと古代ユダヤ教」、宮﨑祐助氏による講演「決断主義なき決定の思考－シュミットの主権的決断からデリダの受動的決断へ」）を開催し、研究所・学会誌「19世紀学研究」第2巻、第3巻を公刊した。

これらのシンポジウム、講演会を通じて明確となってきたのは、19世紀が多くの問題を孕みながらも、一般的に考えられているのとは異なり、豊かな多様性と学際性の時代であったということである。20世紀を準備した世紀として19世紀は、『種の起源』と『資本論』に代表される「歴史化」と「体系化」の時代として、また「産業」の時代としてのみ捉えられることが多い。しかし、20世紀を経てヨーロッパ統合が現実のものとなりつつある21世紀から眺め直すと、19世紀は豊かな可能性の時代としてわれわれの前に現れる。その一端を「19世紀学研究」第2巻、第3巻は如実に現している。もとより今年度開催したシンポジウム、講演会のすべてを収録できた訳ではないが、われわれが目ざしている19世紀学研究・19世紀の再評価の方向性はほぼ確立できたように思われる。

今年度の研究活動を通して今後の重点課題も明確になりつつある。

今後の重点課題の一つは、19世紀の孕む弁証法の解明である。

19世紀は科学技術のめざましい発展、現代的意味での諸学問の確立を強力に推し進めたが、他方で、すでにドイツロマン派に顕著なように、神話学、神秘主義、非合理的なものに対する強い関心をも惹起した。平成19年度年度最初の国際シンポジウム「19世紀と神話学」ではこの問題を取り上げ、非合理的なものに対する関心は決して反「近代」ではなく、「近代」は必然的に両者を内包するものであるという問題提起を行った。非合理的なものに対する関心を反「近代」と捉える限り、「近代」の根本的な反省は不可能であろうというのが結論である。

学問の確立と平行して生じた19世紀の神話・宗教・形而上学への関心は、今年度のシンポジ

ウム・講演でも取り上げられ、その裾野の広さが徐々に明らかとなってきている。マルクスとバッハオーフェンを「双子的言説」として分析した、壮大な視野に基づく臼井論文（「19世紀学研究」第1巻所収）、ニーチェの神秘主義を論じたO. ランガー論文、新人文主義と非合理なものに対する関心を論じた曽田論文（第2巻所収）、E. ハンスリックの音楽論において「天球の音楽」のモチーフを析出した大角論文、シンポジウム「19世紀の再検討－身体論、思想史、比較文化論の立場から－」においてFr. シラーとゲーテの作品にヘルメス主義を読み取った坂本講演は、それぞれの立場からこの問題を扱いその解明に寄与した。今後さらにこの方面の研究は深められねばならない。

第二に、19世紀における学と文化の「多様性」と「学際性」の分析は、今後、さらに必要となるであろう。シンポジウム「19世紀学とは何か－19世紀学研究の可能性」及び「いまさら、ヨーロッパ－ARS（技術、芸術、学問）のあり方を問い直す」の成果は第2巻、第3巻に収録されているが、19世紀がダーウィンの『種の起源』のみならず情報リテラシー、看護学成立の世紀であったことを第2巻に納められた諸論文（廣田講演、野崎論文、後藤論文、金山論文、木部論文）が明らかにしている。またブリコラージュとしての技術の再評価を指摘する川田講演、「都市」の迷宮性と演劇性に「近代」の呪縛からの出口を見ようとする陣内講演、デモクラシー概念の再検討の必要を指摘する村上講演、ロシアの大衆文化を近代と対置させた坂内講演（以上、第3巻に要旨所収）、「東亜」という概念の再検討を行う臼井論文、また19世紀ドイツ文学をシステム理論に依拠して概観しその遺産は20・21世紀世紀に欠かすことのできないものとするW. ブラウンガルト論文、ドイツ19世紀末から20世紀初頭に文化のメインストリームの周縁部に現れた、様々な「生活改良運動」を取り上げたJ. ラートカウ論文、われわれの時代にとっての19世紀文学の意味を画一化に対する「抵抗」と捉えるE. ブノワ論文、フランス19世紀美術史を伝統、革新、オリエンタリズム等の複合体として理解することの必要性を訴え、それに従って「モデルニテ」の概念を再検討するべきとするE. ジャラセ論文（以上、第3巻所収）、またフランス料理の成立の社会史的背景を明らかにした廣田論文等、また「鈴木佳秀教授退官記念特別シンポジウム」における、19世紀フランスの歴史学と歴史教育を扱った佐藤彰一講演およびシンポジウム「19世紀の再検討－身体論、思想史、比較文化論の立場から」における、「魔笛」に近代的自我の確立とその問題点を鋭く指摘した大宮講演は、19世紀という「近代化」の時代のもつ問題性と可能性に光を当てている。

19世紀イギリスにおける「血の神話」問題を手がかりに19世紀イギリス文化の矛盾を論じた金山論文（第2巻所収）、植民地主義の背景にある欧米中心主義に対して「混血」をhybridityとして積極的に評価しようとするTh. シュヴァルツ講演（第3巻に要旨所収）、法的身元確認の手段が近代において足跡から「指紋」に変わったことの文化史的意義を探る橋本論文、先に触れた大角論文、19世紀前半におけるシェイクスピア受容を手がかりに19世紀文化を解明する佐々木論文、ハーモニーの科学と美学を主題とした松本論文等は、その鋭利かつ斬新な切り口によって19世紀文化史の問題性と多様性を明らかにしている。また、シンポジウム「19世紀の再検討－身体論、思想史、比較文化論の立場から－」の諸講演（橋本講演、坂本講演、大宮講演、前

田講演）は19世紀のもつ「多様性」と「学際性」の研究に新たな可能性を示してくれている。

第三に、「東亜」概念の再検討を行う臼井論文（第3巻所収）、「鈴木佳秀教授退官記念特別シンポジウム」における、イギリス・ドイツで法学を学び、日本民法の父と言われる穂積陳重の法思想の中に現れる伝統的なもの（「国體」）を描出した石井講演、19世紀末から20世紀初頭における中国知識人による欧米思想の選択的受容と独自の発展を論じた佐藤慎一講演、シンポジウム「19世紀の再検討－身体論、思想史、比較文化論の立場から－」における日本における欧米の学問受容を扱った前田講演等は、19世紀における欧米のアジアに対する影響と、アジアにおける独自の思想の発展の可能性に触れている。アジアは欧米の科学技術・思想をただ受動的に受け入れただけではない。アジアは、伝統的思想と欧米思想との対決を通して「近代」のもう一つの可能性を考え抜こうとする意志をも有していたのである。思想のこのダイナミズムは今後さらに解明されねばならない。

以上、本年度の活動の総括と今後の課題の概略を記してみただけでも、19世紀学研究の今後の可能性が瞥見できるであろう。今に生きるわれわれにとって19世紀とはどのような世紀だったのか、20世紀には見えなかったどのような可能性がわれわれの眼前に現れてくるのか、未来へと生きざるをえないわれわれは、何を目指して進むかを知るために過去を見つめ直す作業を怠ってはならない。その意味で19世紀学研究はさらに広く、さらに深く行われねばならない。

最後に私事にわたるが、19世紀学研究所所長･19世紀学学会長である鈴木佳秀先生の2回の講演「ヴェーバーと古代ユダヤ教」と「『ヨブ記』における神義論と19世紀学」は、当学会･研究所設立に文字通り尽力された先生の学識と透徹した論理をいかんなく示した渾身の講演であり聴衆に大きな感銘を与えたことをここに記し、先生のご退官の記念とする。

以上をもって、平成20年度新潟大学人文社会･教育科学系プロジェクト経費（学系基幹研究）報告としたい。上記の研究活動の一部を可能にしてくれた学系に対して心から感謝申し上げる。

（文責：ＳＫ）